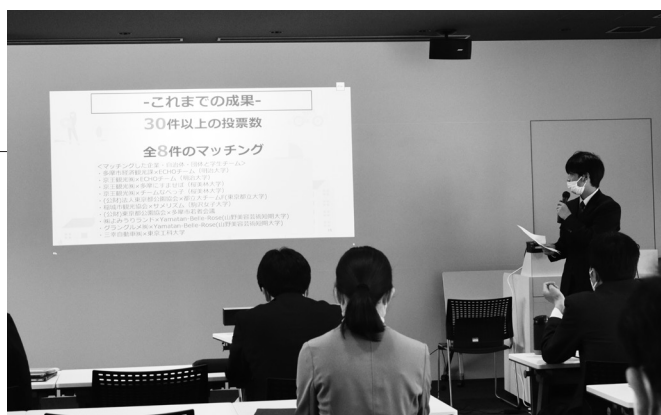


TYO・TAMA
まちづくりラボ

多摩のあらたな観光まちづくりを目指す 「タマリズムプロジェクト」!!

東京多摩地域の自治体、大学、旅行会社の「産官学連携」で

多摩市と稲城市、多摩大学、京王観光(株)が立ち上げた「タマリズムプロジェクト」(発足当初の名称は「多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト」)は、地域の大学生からマイクロツーリズムのアイデアを募り、東京多摩地域における観光振興とあらたな観光メニュー開発を目指すプロジェクトだ。スタートから3年目を迎え、この5月9日にはその経過発表や認知拡大のためのシンポジウムが多摩大学多摩キャンパス(東京都多摩市)で開催された。いったい、学生たちのアイデアから多摩を舞台にどんなマイクロツーリズムが生まれようとしているのか、さっそくレポートしたい。



上:タマリズムプロジェクトシンポジウムの様子/下:よみうりランドが運営する新感覚フラワerpark「HANA・BIYORI」

マイクロツーリズムコンテスト(タマリズム)を開催し、さっそく大学生などに呼びかけマイクロツーリズムの企画を公募。集まった学生たちは自治体・観光協会・地元事業者を巻き込みながらアイデアを練り上げ、それぞれ事業化を目指した。では、これまでどんなアイデアが生まれ、どんな風に進展してきたのか。そのあたりを紹介していきたい。

多摩市×明治大学 多摩市の公園や散策路の 魅力を伝える企画

2021年度のタマリズムで

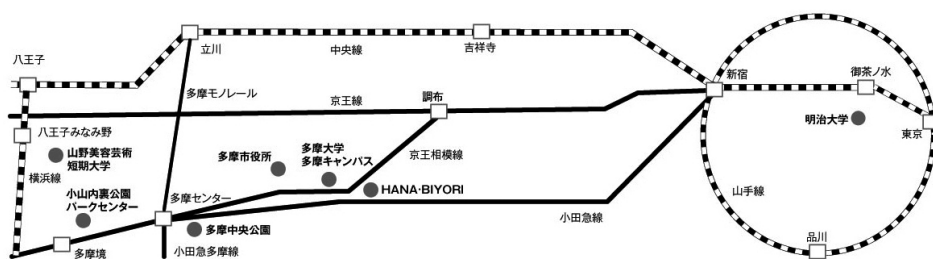
最優秀賞に輝いたアイデアは、東京都千代田区に駿河台キャンパスを持つ明治大学の学生たち(ECHOチーム)の「たま公園ロゲイニング」。地図を片手に制限時間内で定められたスポ

ットを回る競技「ロゲイニング」で、多摩市内に点在する公園や散策路の魅力、歩きやすさを体験してもらおうという企画だ。多摩市経済観光課商工観光担当の西條祐貴氏によれば「この取り組みを知った地場企業から公園でのキッチンカーの出店やゲームの景品の提供などで協力したいと申し出があった」とのこと。学生たちはファミリー向けから高齢者向けにも視野を広げて検討をすすめているが、「いかに地域を巻き込みながら継続していくか」が課題になっているという。

新感覚フラワerpark 「HANA・BIYORI」x 山野美容芸術短期大学

テーマパークをフィールドに
学生たちのアイデアを実践

タマリズムを機に、(株)よみうりランドが運営する新感覚



都心からクルマや電車で1時間未満のアクセスの良さもあって、多摩地区には短期大学も含めると50校以上の大学がある。そういった教育環境を反映して「多摩学会」「マチカドこども大学」「法政大学ソーシャル・イノベーションセンター」など、多くの大学で産学官民の連携が誕生している。

2023年度のテーマは「観光まちづくり」 タマリズムプロジェクトの流れ

4月21日(金)	事前説明会
コンテスト開催の概要や前年度の出場チームの事例紹介	
↓	
5月9日(火)	シンポジウム
2年目以降に事業化した企業が成果を発表	
↓	
6月10日(土)	マッチング会
学生が行政や外郭団体(観光協会など)、企業を招いて交流、連携して企画を磨き上げていくための関係性を構築	
↓	
7月8日(土)	1次審査会
マッチング会での意見を基に再構築した企画内容を各チームがプレゼン、審査員による審査を実施する。審査を通過したチームには活動支援金(最高10万円)を支給、ドラフト会議に向けて企画を磨き上げていくこととなる	
↓	
7月～11月	実証実験期間
1次審査会通過時に支給される活動支援金を活用し、企画の実証実験(モニターツアーやアンケート調査など)を行う。その結果を基にドラフト会議での発表内容を組み立てる	
↓	
12月15日(金)	ドラフト会議(最終審査会)
タマリズム最後のイベント。学生たちが1年間取り組んだ成果を発表、表彰団体を決定する。コンテストの企画を担う多摩大学経営情報学部の長島剛教授によれば「最終審査会は『ドラフト会議』とも呼ばれ、たんに最優秀賞を決定するだけでなく、プロジェクトに参加する自治体や企業が『協業を期待できるチーム』に対し投票を行う」という。もちろん、このドラフトで期待値が高かった企画は次年度の事業化を目指す	

組織構成

主催 タマリズムプロジェクト実行委員会
 実行委員会 多摩市・稲城市・八王子市・日野市・町田市・多摩大学総合研究所・京王観光株
 事務局 タマリズムプロジェクト実行委員会事務局
 企画 多摩大学ながしまゼミ

フラワーパーク「HANA・B・Y・O・R・I」(稲城市)と山野美容芸術短期大学(八王子市)がコラボする企画が持ち上がった。フラワーパーク側が大学の課外授業のフィールドとして提供し、若者ならではの発想やSNSなどでの発信力を使ってあらたな客層を呼び込んでいく、というのが企画の主旨。学生たちは「バラを使った美容」をテ

ーマに観光メニューの開発などに取り組んできたが、そのアイデアにフラワーパークが注目したことから、このコラボが実現したという。「地域密着をコンセプトに、地域に根差した活動をより展開していきたい」と話すのは、同社ボールパーク事業部の西村卓也氏。今後も地域に関わるさまざまな企画を検討しているそうだ。

東京都公園協会×東京都立大学 公園の魅力発信から 周遊観光プロジェクトへ

もうひとつ、都立小山内裏公園(町田市)での東京都立大学の学生チームによる取り組みも進展している。公益財団法人東京都公園協会都立桜ヶ丘公園サードビセンタール長(前都立小山内裏公園パークセンタール長)の

山田智氏によれば、この公園には動植物の保全のためいつもは閉鎖している「サンクチュアリ」が4カ所あり、イベントの際などに特別公開されている。だが「舗装されていないため、ハルディキヤップを持っている人には楽しみづらい」ことが課題となっていた。これを知った学生たちが21年6月、タマリズムで同園を舞台とした子ども向け

レクリエーションを企画、このプレゼンテーションを受けた公園協会は学生たちとワークショップを重ね、「ハルディキヤップを持った人たちも楽しめるよう、サンクチュアリのミニチュア版『サテライトサンクチュアリ』を舗装路のそばに設置してはどうか」ということに。さっそく、学生たちは公園職員と協力しこの企画を実行、バリアフリー環境下でサンクチュアリの魅力を楽しめるようになった。

この取り組みが実現したことで、現在進行中である多摩丘陵公園のPRのためのオリジナルキャラクターを活用しようということになったり、飲食店や公園を核とした地域周遊観光はどうかということになった。いずれもプロジェクトが立ち上がり実現しそうな勢いだとか。

このように、タマリズムプロジェクトでは学生たちのさまざまなアイデアが着実に歩をすすめてつづける。今年も夏の1次審査会で「観光まちづくり」をテーマとしたアイデアや企画が多数登場してくるはず。そして審査を通過した企画がフィールドワークと最終審査会を経て実現を目指すことになる。一部は地域の旅行商品、マイクロツーリズムとして定番となっていくかもしれない。楽しみである。



都立小山内裏公園の舗装路沿いに学生たちが設置したサテライトサンクチュアリと、その解説板

※ マイクロツーリズム……自宅から1～2時間の近場で密を避けて行う旅行・観光のこと。コロナ禍で提唱されて以降、地域の魅力の再発見につながるとして注目されている。